

ユダヤ人について理解を深めよう

2020/01/15

古山英二

1. 日ユ同祖論は、ロマンティシズムに満ちた魅力ある説には違いない。しかし、日ユ同祖論を始める前に、ユダヤ人とは何か、という根本問題に関する理解を深める必要があるだろう。
2. 広く知られているように、ユダヤ人は大きく二つのグループに分けられる。セファラディムとアシュケナージム (Judeus sefaradim e Judeus ashkenazim) である。前者は中近東に多く居住するセム族であり、後者は欧米系のいわゆる”白人”である。日本人の多くはアシュケナージムに実際に接することはあっても、セファラディムに接する機会はあまりないのではないと思う。高名なピアニストのウラジミール・ホロウィッツ、バイオリニストのヤッシャ・ハイフェッツ、物理学者のアインシュタイン、ハリウッドの俳優、カーク・ダグラス、バーバラ・ストライサンド等々、いずれもアシュケナージムである。
3. 個人的話で恐縮だが、私のサンパウロ勤務時代、会社のトップセールスマンを努めていたフェリックス・バラザーニ氏は、エジプトはアレクサンドリア出身のセファラディムであった。外見的印象は、”西洋人”というよりは、”中近東人”、あるいは”アラブ系”といった感じであった。ブラジルではセファラディム系ユダヤ人と多く接する機会を持ったが、彼らは、外見上はイラン系、トルコ系、レバノン系と区別がつかなかった。また、アシュケナージム系ユダヤ人は、外見上ヨーロッパ系ブラジル人と区別がつかねた。
4. ユダヤ人という concept が、文化的・経済的・政治的な概念なのか、それとも生物学的・遺伝学的概念なのか、この際良く考える必要がある。ユダヤ人という概念を科学的、つまり生物学的、遺伝学的に捉えようとする傾向は、ナチス・ドイツ時代に頂点に達し、「ユダヤ人種」という概念を生み出した。この考え方は、人種間に優劣が存在するという議論に発展し、優等人種であるアーリアン族の血統を、劣等人種であるユダヤ人種が汚しているという恐ろしい人種偏見 (racism) となり、ホロコーストを引き起こす契機となった。
5. 「日本人の40%はY染色体のDNAにYAPという特殊な遺伝子配列があり、中国・韓国人には全くない、云々」といった議論は、生物学的・遺伝学的考え方に基づいており、人種偏見に繋がりがねない。YAPとはY-chromosome Alu Polymorphismの略で、Y染色体の一部にAlu配列(制限酵素Aluで切断されることからこの名が付いた)が挿入された突然変異である。Y染色体ハプログループ(異なる染色体の対立遺伝子グループをhaplotype groupという)のうちYAPを含むという点で、日本人とユダヤ人は共通しているという。その意味では、ネルソン・マンデイラと共通のYAPを含む日本人も存在することを指摘したい。こうした生物学的・遺伝学的議論は、人種優劣論を誘発しかねない。
6. テルアヴィヴ大学のシュローモー・サンド教授は、「ユダヤ人という人種概念は発明されたものだ。」という趣旨の *The Invention of Jewish People* という書物を書いている。

—完—